





1278  
6

曲亭馬琴編輯

福丁

# 朝夷巡嶋記笛

一柳齋豐廣畫

書肆  
文金堂梓

朝

有序



丙子，玄月，朝夷記後集成矣。客見而，丐閱，未許。客艷然不悅，遂朝。齊諧小說之鼻祖也。源語女史也。然無益名教，自是以降，瑣時化，又不足其才。雖錦心愛者，其於裨益彌遠矣。子亦以彼乎。以此為師乎。費思慮於戲墨，不



松田 60 72



之將至謂之智可乎。窺新奇於時  
欲殉于名利謂之才可乎。夫爲大  
得鯛魚爲小釣者守鯢鮒其  
難矣。飾小說以醒蒙昧其於大  
矣。今見子頭髮種種營衛且衰  
述之勞歎予曰然有其事物之嗟  
一カ鯛雖難得貪以死餌士雖懷道  
死祿不亦悲哉。是故善釣者必細其

芳其餌而引魚于千仞之下。若以直針  
爲釣維何魚之能得。由此觀之好師於  
人者有口無行猶直針而爲釣也。崇論  
眩議亦無裨益名教解也。固陋非有用  
之器自知散材不遊于高擗管臨硯池  
著書令賣之萬事無心與釣翁一般。雖  
然不羨磻溪玉璜之祥嘗獨坐蓬閒以  
觀涿俗長短經綸以揣情致於是其言



為餌勸懲為釣投竿於江湖者有年矣。巨口細鱗集其淵往來傍觀之人愛其魚相樂而不去心在灌瀆則無風波之患日為引鱗鱖不與人爭利一釣一得。以畜數口耳簞笠之外又無餘樂其樂乃以延年何疲勞之有乎物之嗜欲不一客則以此為患苦解則以此為嬉樂。冰炭不合彼此異其趣是以不得聽命。

也客喟然嘆曰昔者聖人以道德為竿綸以仁義為鈎餌投之天地間則萬物其有也子亦知而言之乎予笑而不應。客去將序於是編即陳此事顏于簡端。文化十三年立冬後一日

簞笠漁隱識





朝夷巡嶋記全傳初輯第二編總目錄

第十一條 射向鳥證據 樹間隱返命

第十二條 卜繕葺夜醮 黑白谷地苺

第十三條 過去來會話 巖堰水煩禁

第十四條 紉柳廿廿井 岳神地藏會

第十五條 戮惡劍山麓 慶善百田宿

第十六條 迎旭汀友鶴 吟風溪鬪體

第十七條 磨出礪竝月 占夢黑川堂

第十八條 苗頃時濁水 客去鴈春霜

第十九條 野干玉罩燈 蘇彌染袖巾

第二十條 網總袴游偵 假裝束情郎

此編以十卷二十條為初輯二十條以下為中輯當陸續刊行焉其十條以上見初編第一卷繡像右





早蟬五頭平

鳴子の引太郎



聚噪斜  
陽外  
群飛暮  
雨中

八嶋室平師任

淺良井



草裏不  
知終  
露尾  
山前唯解暗藏頭

繪向判五



庄司勝の三

小三二





岡田冠者親義



月... 二... 三...

一生富貴  
皆空夢  
千古英  
雄只斷碑



巴の尾

草... 二... 三...

陣... 永...



余嘗思大約坊間印行の草紙物語は五ヶの訛謬ありと他一草帛を  
 かくおたつてごうへをわけてこれを數人毎編倉卒の間は成る稿を易く暇を  
 一段稿了まば一段備書は附属一巻浄書せしが一巻棗人は遞互に彼我  
 そのエれを貪りて速なりんと改む所故は作者といへども坐は誤る作者  
 謬る備書画工謬る書画謬る棗人又謬る棗人謬るといへども書肆も亦復  
 改むは疎多しゆまごその失を補ひ得てやがて製本誤既も於是閨人  
 推蒙競少くをを閱るを句讀を訛る語勢を失ひ文義を謬る  
 稀これをもが著編の五謬をいひのり就中この書は前板棗人の  
 刀をもて戕るもの多し或ハ圈夾傍訓を削去る或ハ真名を削去る  
 補少は假字を以て菰紫琴を筑紫と云えをへしひぬをいし云り  
 一としをわをいしと云ふの類亦及しと云しを羨まおつて違はれども云は上はおくの

假字ハ下よつくの假字をいへも亦これに同じ彫刻かくの如く  
 辟ハ蠅頭塗鴉の如し作者といへども読はざるあり書肆はこれに驚き  
 為よその拙を補ひ削去るを修復せんとするは比校は稿本を  
 獲らると記を彼此を誤りて惑ふ遂はさびつをせしあめきを前にとし  
 痛し記をいへば記とさる類少くは作者意外の失あり或  
 曾魚鳥馬馬の嘆あり經傳方書といへども誤行を記とをほむ  
 況んや燈下の戲墨蠶空無根の書はかつて自らの謬を論は不足れども  
 彼も一時これ亦一時の著の文場は遊戯もこの悞脱錯字を  
 知りて改るよりかくて江湖上は弄賣せばいとも愧べぬなり況んや余  
 この淺をり書肆は示はて再四書肆余が言を理ありとて教諭を  
 棗人は侍小棗人慚愧して刀を竊む此度ハもろく工を擇むといは彼我力を



數多ると然ハ判字チ、免の如く、乃ハ佳本とあり、ぬべし人子賢と不肖と、  
 孝ハ不肖も賢も、一技巧と拙とあり、よくその心を用ゐる、免ハ拙も巧も捷とあり、  
 抑余が拙を、世の看官も棄られざるハ用心かくの如く、して固くその愚を守り、  
 益京撰ハ名多かり書肆ハ梓を藏り、富て製本も精妙、唯余著編毎歳  
 秋後ハ俄頃ハ研を費くをもて判刻の日久し、乃ハよく多く謬事、在古風葉の  
 喻ハ感して五謬を辨して自笑をとり、  
 策笠漁隱再識

家傳神女湯 一包代百銅

婦人諸病の良劑 第一産前後ちの道  
 即功あり 功能詳ハ此書の初篇ハ載り

精製奇應丸

大包代銀貳茶 中包代壹茶 小包代五分 但ち、一賣不仕ハ  
 茶種を多くし、製方を精細をとりてその功尤神妙也

製藥并弘所

江戸飯田町中坂下 南側四方みま店の向

瀧澤氏精製



取次所 江戸芝神明前 和泉屋市兵衛 大坂心齋橋筋唐物町 河内屋太助

朝夷巡嶋記全傳 第二編 卷之一

東都 曲亭主人編輯

初輯 第十一

射向の鳥の證據  
 樹間隠れ返命

建仁元年辛酉春三月。朝夷三郎義季、大石山の獵倉、乃野時夏が獵箭を  
 漏せる。野雞を矢庭に射と落し、栗が誇ると、吟禁め、滋藤の弓、挾と、  
 樹蔭より、少くも彼の、ゆ、と、なる、や、衆皆呆と、目と注し、忽、池、の、奥  
 さらり、當下、義季、乃、彼、主、従、を、信、と、え、り、わ、り、近、く、進、み、合、た、る  
 弓を、夏、哩、と、捨、て、時、夏、義、季、乃、ら、對、ひ、恭、く、を、膝、に、か、き、目、を、  
 志、く、け、り、義、季、乃、の、遠、く、禮、を、返、し、く、慙、懃、も、その、名、を、問、ふ、と、さ、る、程、時、夏、  
 回、火、の、如、く、衝、と、出、り、立、塞、り、弓、杖、突、て、義、季、乃、を、且、く、睨、視、て、声、を、あ、り、立、和、主



いろいろの多き射くか世の野雞を奪ひとらん謀るやめりや  
 鳥惜しむる後獵箭を漆も平くつが多と写てあり  
 當坐の恥辱後日の批判のうも脱免のくも和主と證やある  
 めりやと弓矢八幡をええを去せと敦園迫り弓と槍の鞘を  
 義邦吐嗟と推禁め短慮あり野生旅人と思ひたるものも  
 向く撃果を後悔其処より一一人小賊心あり野雞を最  
 落とた奪ひとせも走らん海禁ゆる弓矢の古実戦場の相争  
 争ひありとぞゆくその故ありといふも且某は任せぬと和譚  
 うち對ひ何國の人と知せと言來介も似されども  
 一隻の野雞は二人のぬぐれと定むつも鳥小立る箭より  
 平に證あり介る野雞を射るといふ和殿も又證據あり告て

某へ彼知らる向ひに射く落せし射向の箭を正に證據を  
 不吉和君の箭がゆえ過ぐ又立て鳥はむかへ貫くは骨より背へ  
 中ぐりけれめても争ひぬやとわれし時夏もそれへと  
 一句もかき口と喝て眼を睜て西三歩もどよ巡りけり  
 竹の時夏が私平并平の苦くげ身と辟り列卒の目とほは袖と掖  
 堪ぬ笑いと嘆たふ紛々つひわら義邦愧さありらま芝折敷て  
 片膝と著てぞぞ嘆息一面目も三郎との吾們武弁の家は  
 不覺の争ひ及ぶ若輩のトとらら併寒郷人となら良師小  
 遇て弓箭は煅煉せられ只田舎見の頑置ゆ多とひ捨て許容あり  
 和様い某より面とかこ心地しく教ひて言ふのみといと可  
 初解らむと義秀も又貌を改め分は過る和君の和論痛入る



某<sup>その</sup>とも村落<sup>むらたつ</sup>人<sup>ひと</sup>とありて父<sup>ちち</sup>の鎌倉<sup>かまくら</sup>様の風流<sup>ふうりゆう</sup>のあざむき。武藝<sup>ぶげい</sup>を嗜<sup>こぼ</sup>むといふまじくや。古実<sup>こじつ</sup>をいふと鮮<sup>あざむ</sup>くといふ。余<sup>あつ</sup>も況<sup>いは</sup>むまじくや。人の遊山<sup>ゆうざん</sup>を妨<sup>さまた</sup>げし身の樂<sup>たのしみ</sup>もよまじくもあざむき不憶<sup>おぼ</sup>弓箭<sup>きうせん</sup>を獲<sup>え</sup>つれば。訪<sup>と</sup>ふ人<sup>ひと</sup>は見えの牽<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>物<sup>もの</sup>欲<sup>ほ</sup>得<sup>え</sup>といひつ。こゝを將<sup>まさ</sup>稚氣<sup>ちいき</sup>の僻事<sup>ひくじ</sup>なり。武藝<sup>ぶげい</sup>は未熟<sup>みじく</sup>ある。某<sup>その</sup>は射<sup>い</sup>く落<sup>お</sup>さし野雞<sup>やどり</sup>が不幸<sup>ふしやう</sup>に似<sup>に</sup>れども原<sup>はら</sup>の弓箭<sup>きうせん</sup>のよれよれも。武器<sup>ぶき</sup>と擇<sup>えら</sup>む。の本事<sup>ほんじ</sup>は。射<sup>い</sup>ぬ。のふの十慮<sup>じゆりゆ</sup>の二失<sup>ふたしつ</sup>と某<sup>その</sup>が愆<sup>とが</sup>の功名<sup>こうけい</sup>は定<sup>さだ</sup>られ。抗<sup>かた</sup>疑<sup>ぎ</sup>を散<sup>ち</sup>らあひる。寔<sup>まこと</sup>は。あはれた幸<sup>さい</sup>あり。あんなと抗<sup>かた</sup>さぬあひねと謙<sup>けん</sup>を。却<sup>かえ</sup>人と敗<sup>ま</sup>さぬ大<sup>おほ</sup>丈夫<sup>ちゆうぶ</sup>の器量<sup>きりやう</sup>とて。義邦<sup>ぎぱう</sup>のいよく感<sup>かん</sup>と。慰<sup>なぐさ</sup>む。既<sup>すで</sup>に斯<sup>かく</sup>うら鮮<sup>あざむ</sup>く。隔<sup>へ</sup>あはれたまなぐ。何人<sup>なんびと</sup>と訪<sup>と</sup>んと。途<sup>みち</sup>の疲勞<sup>つかう</sup>と厭<sup>いと</sup>む。高峯<sup>たうほう</sup>とて。登<sup>のぼ</sup>りぬひ。その名<sup>な</sup>何<sup>なに</sup>といふのぞ。向<sup>むか</sup>む義秀<sup>ぎしゆ</sup>も。点頭<sup>てんとう</sup>某<sup>その</sup>が訪<sup>と</sup>ふ人<sup>ひと</sup>の

その中<sup>なか</sup>へそとらめ。免<sup>めん</sup>より云<sup>い</sup>ふと。向<sup>むか</sup>むといひ。寔<sup>まこと</sup>は不慮<sup>ふりよ</sup>の。いよと。言<sup>い</sup>ふ。暹<sup>せみ</sup>あざむき。吉見<sup>きちけん</sup>冠者<sup>くわんしや</sup>と。和<sup>わ</sup>君<sup>きみ</sup>と。それら尋<sup>たづ</sup>ねる人<sup>ひと</sup>とのいよを義邦<sup>ぎぱう</sup>の。某<sup>その</sup>則<sup>すなは</sup>ち吉見<sup>きちけん</sup>の郷士<sup>きやうし</sup>源義邦<sup>げんぎぱう</sup>なり。これ安房<sup>あひ</sup>も下總<sup>げすう</sup>も相識<sup>あひし</sup>のいよ。いよ。いよ。名<sup>な</sup>と。和<sup>わ</sup>殿<sup>でん</sup>は。和<sup>わ</sup>ひ。ひる。幸<sup>さい</sup>に。和<sup>わ</sup>の書状<sup>しよじゆう</sup>が。疑<sup>ぎ</sup>ひの鮮<sup>あざむ</sup>ぬも。こゝと。義秀<sup>ぎしゆ</sup>の懷<sup>なご</sup>中<sup>ちゆう</sup>の。一通<sup>いつとう</sup>と。某<sup>その</sup>が武術<sup>ぶじゆつ</sup>の師<sup>し</sup>たり。健田<sup>けんた</sup>秀<sup>しゆ</sup>乃<sup>な</sup>作<sup>しやく</sup>老人<sup>らうじん</sup>の尺牘<sup>せつてん</sup>之<sup>の</sup>當國<sup>たうこく</sup>學校<sup>がくこう</sup>の学頭<sup>がくとう</sup>と。均<sup>しん</sup>長老<sup>ちやうらう</sup>の。舊<sup>きう</sup>友<sup>ゆう</sup>ある。一通<sup>いつとう</sup>と。寄<sup>よ</sup>せる。不幸<sup>ふしやう</sup>め。長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>は。三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>已<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>は。學<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>を。失<sup>し</sup>ふ。進<sup>しん</sup>退<sup>たい</sup>其<sup>その</sup>外<sup>がい</sup>。又<sup>また</sup>いよ。いよ。切<sup>せ</sup>く。彼<sup>かの</sup>長<sup>ちやう</sup>老<sup>らう</sup>の由<sup>ゆ</sup>縁<sup>えん</sup>の。人<sup>ひと</sup>の。請<sup>こ</sup>問<sup>もん</sup>。ある人<sup>ひと</sup>答<sup>こた</sup>へ。今<sup>いま</sup>の学頭<sup>がくとう</sup>の真言<sup>まごん</sup>密宗<sup>みつしゆ</sup>の碩<sup>しやく</sup>学<sup>がく</sup>を。







和殿の入りともめも吉見ぬと相謀らん枉く彼如(おほ)越(あ)と他事  
 ろく賄話(こび)誘引(ひきま)が義邦(よしかた)も亦(また)是(こゝ)を飲(の)び刀野(や)ぬ瓶(びん)を飾(かざ)るとあり身(み)と  
 禮(れい)々(々々)客(きやく)と愛(あい)せらるるが度(ほど)ふ所(ところ)あり必(かならず)る推(お)辞(し)多(おほ)ひと共(とも)侶(り)は勸(すす)め辭(し)を  
 竭(つき)之(の)親(ま)切(せき)は義(よ)秀(ひで)秀(ひで)面目(めいもく)身(み)はあまらるる聊(いさ)も推(お)辞(し)を某(たが)文武(ぶぶ)修(しゆ)行(ぎやう)のる一(ひと)処(ところ)  
 不住(ふぢ)のりあるは過(と)世(よ)のる契(ちぎ)やありけん兩(りやう)君(きみ)遐(とほ)棄(す)るる身(み)不(ふ)肖(せう)は  
 ひど義(よ)は仗(たす)て死(し)するも悔(く)み況(いは)交(まじ)を結(むす)んとす美酒(びいゆ)佳(よ)者(しや)えあるは  
 何(なに)如(ごと)くもあまらるるやいと飲(の)みと愉(たの)しく諾(な)ひく義(よ)邦(かた)のふもさるる  
 時(とき)夏(なつ)はあまらるる飲(の)みとあまらるる客(きやく)人(ひと)をさるる從(よ)僕(べ)井(い)平(へい)幸(きやう)下(げ)膳(ぜん)庵(あん)  
 送(おく)らるるゆへ稀(まれ)なる歡(あ)會(あ)い野(や)雞(けい)のさるる看(ま)らるる某(たが)冠(かん)者(しや)と  
 ちり(ちり)要(ま)時(とき)射(や)獵(り)て彼(か)如(ごと)く取(と)合(あ)い思(おも)ひぬやと又(また)之(こゝ)を義(よ)邦(かた)のる  
 るる。六(む)の哉(いかで)寔(まこと)はあまらるる。され和(わ)殿(でん)の後(ご)者(しや)達(たつ)を覺(おぼ)せんとあまらるる。

三(さん)二(に)を了(り)すとのりせも果(は)む。時(とき)夏(なつ)頭(かぶ)をさるる掉(お)す。和(わ)殿(でん)の後(ご)者(しや)とるる  
 わか彼(か)上(かみ)繕(と)り其(その)恩(おん)顧(こ)のゆへに他(た)一人(ひとり)も任(ま)りて。やとれ井(い)平(へい)幸(きやう)と  
 呼(よ)ぶ。時(とき)夏(なつ)が後(ご)者(しや)媪(お)子(こ)井(い)平(へい)幸(きやう)年(ね)あまらるる世(よ)二(に)歳(さい)面(めん)白(しろ)く眉(まゆ)秀(ひで)と人(ひと)品(しん)  
 骨(ほね)相(あ)賤(せん)るる淺(あ)録(ろく)の身(み)甲(か)小(せう)品(しん)草(そう)の壁(か)を臙(や)縛(ばく)と。いと精(せい)悍(た)れた打(うち)扮(はん)  
 ろるが阿(あ)と忘(わ)つ慮(り)なく。主(ま)のあたりは跪(ひざま)坐(ま)ると時(とき)夏(なつ)を結(むす)と。海(うみ)の  
 客(きやく)人(ひと)を膳(ぜん)庵(あん)へ案内(あんい)せよ山路(さんぢ)あり鬼(おに)魅(め)猛(まう)獸(じゆ)の患(わづ)をさるる。その  
 弓(ゆみ)箭(や)と推(お)す。噀(は)つて射(や)す落(お)せり。臆(おそ)く不(ふ)覺(かく)をとる。汝(なんぢ)越(こ)度(た)のる  
 ろる。禍(わざ)り身(み)及(およ)びる。あまらるる。と目(め)を論(ろん)す。あまらるる。あまらるる。  
 わげく。遮(さ)よせ。受(う)けて杖(つゑ)を御(ご)らるるをゆるくひあり。途(みち)ゆく鬼(おに)とる。あまらるる。  
 則(すなは)ち主(ま)君(きみ)の怨(うら)敵(てき)あり。鬼(おに)神(かみ)ともひり。あまらるる。あまらるる。あまらるる。  
 とうとう。あまらるる。時(とき)夏(なつ)竟(は)れ命(いのち)と笑(わら)ふ。それゆへあまらるる。あまらるる。あまらるる。



并平の義秀よとて對ひて額をつた。かん郷導侍ん誘ふとて先よ  
 立美秀をれを愛ひて。美邦時夏よ辞別は林鹿をさうさゆく後よ并平の  
 弓をりて。道の草と拂つ。林鹿をさへ世餘町とや三十町中本ぬんとも  
 比忽地よ左在て。美秀ようら對ひる如よりト徳庵六路一條のく遠  
 くん。某の身の暇をあり。主よ従ひて後あり。復見よ入るたあり。曩  
 みのかん才が射藝は俊才。一發一言よあられと。あう感ざる所。微軀魯  
 鈍俗眼ととども。既よ豪傑あるうととあれで。いよへの人の言葉よ交淺くと。  
 言深たりの愚の身賤くと。貴きと犯之りの惑ひと。信とれとて。  
 諫るもの識ると。まのこれのれ人よあつて。む宜うらざる所。おそれ慎むと  
 なまごも。いん止んへあうく。心つたな所。あつて。罪を英士よ贖ふ時  
 たり。あまて不肖を顧む。微生が信よ儆ふもの。夫良禽ハ樹を擇む。明

君ハ臣を擇む。今の世ハ臣も亦宜く君を擇べ。いよせん某ハ不幸よくと。良  
 主よは遇む。あまてと。苟も。その禄を食りの善悪よ就き。邪正よ就き。  
 主命惟聽さんや。され違ハ身と亡との捷徑を開くよ似たり。これ勇も捨る  
 べん。智も亦及ぶとあり。人を識るもの。不慮の仇。身を衛るもの。ハ  
 危きは近つと。さのゆえ。猛た獣。又悍き鳩。あつて。又をうく。山賊。某よ  
 弓前をりて。かん身あうよむと。みづうら。御示たか。えん。えん。えん  
 のと。速たて。嘆息と。義秀つくと。うら。あつて。小膝を。礎と。拍。呼  
 賢るうら。媪子生。れ金玉の高論。惜へ。いよ。才子を。御士の奴僕と。いよ  
 造化の神の僻事。ならん。いよ。所悉そのあうを。いよ。其の。當  
 園。いよ。留る。あつて。必一言の信。いよ。酬ん。賢る。あつて。感嘆と。あつて。海  
 別る。いよ。忍び。いよ。并平も。又。嗟嘆と。今。いよ。時夏。いよ。持。いよ。いよ。



上膳庵の前面の段より遙く入るる森のころ大竹藪を背よりする。奔室の  
 しく鄰家のひきま。其処よりあれたる。隠れあつてもいふまじき事と指し  
 叮嚀と指示を義秀あつち点からせ和殿を勞しより。退りあつて西君は  
 枯なる。とやさなをゆか。とぞささひうけ。彼草庵とぞりゆく。井平は  
 舊の路へ帰ると見え。詰とえたり。猛らう箭の後のく。満月の如く  
 弯なり。寃固めく。弾と射る。弦音とより共。義秀と身と論く。壁は  
 鴉前へ頂と幽撮より。四まあより。前面翳る松の幹へ一揺揚てぞより  
 ける。後もあつて。射掛る二の箭を。義秀右の袂に受とめ。引抜棄て。ま  
 くらん。悠然とゆく。後影を。井平霎時目送り。吁と一声。暗賞。合ひる  
 弓とより直くと。獵場のくへ還りけり。さる。後より刀野太郎時夏へ嚮る  
 美邦は。憚り。機密と井平は。示せ。及び。渠より。意中と察せ。欵

けり。あつて。と。相像の。ま。わ。心りとあつた。れ。担獵と假托。衆人を  
 離とつ。村鹿の。五六町。漫走する。後より井平へ弓と引提。と。遠く。還り。義秀は  
 けり。時夏へ。と。抗て。遠く。一。折れ。よ。欵を。遅し。と。樹の。蔭へ。召入。せ。く  
 声を。潜。嚮。ま。視。目。が。ま。れ。バ。明。く。地。ま。の。い。び。ご。り。被。う。謎。を。何。と。解。う。  
 素浪人奴の。い。ま。と。や。と。向。バ。井。平。さ。の。朝。夷。を。送。れ。と。く。弓。箭。を。あ。の。の。め。ら。ひ。  
 む。絆。の。端。太。く。推。量。し。く。い。の。び。を。彼。奴。を。射。く。落。し。主。君。の。恥。を。雪。え。  
 と。あ。の。の。う。ら。色。も。も。え。せ。び。緑。段。より。別。を。告。遣。り。過。し。あ。り。て。只  
 一。箭。も。と。ま。な。似。必。射。損。一。た。ま。心。忙。と。發。つ。二。の。箭。由。身。ま。の。ゆ。ま。は。僅。し  
 袂。を。縫。留。より。然。れ。ども。朝。夷。へ。騒。ぎ。さ。る。氣。色。も。な。く。徐。よ。その。箭。を。抜  
 棄。て。い。ろ。へ。の。も。と。と。段。を。さ。り。ぬ。某。既。は。二。條。の。鴉。箭。を。他。は。失。ひ。の。勅。は  
 大口。撃。と。る。と。も。あ。ら。ん。づ。も。い。り。ひ。び。追。殺。せ。れ。ぬ。を。幸。あ。り。と。い。ひ。た。



彼人の勇敢武藝當今を雙とのふき快毛を吹死疾を求へる御まろを  
 轉し只信を多くかん和睦ゆかど諫れば時夏彼を大息吻死原來彼朝夷  
 奴のどのいふやん癖者なり。汝が諫言その扱われども今さうと友垣借り  
 くれ又彼奴を殺されまん然と鹿に會せむ。憶まうとせらん世に  
 究めて難義あり。いふせまうと頼を拵て困ト果する主の頼をばさうら  
 熟視す。さうら石ゆ。某一の計あり。箇様々宜い。酒宴の席を  
 某を多敷なよせんと敦圍なる人々諫め救ふべ。當下君の怒を鎮めて  
 某と遠離なる。朝夷あるべ。あひるん。これを射つ。并平が心ひらけ  
 所ははし。主命よあひらぐりた。その疑ひを解と死へあひ身の後暗るん  
 ゆく。彼壯士は信をりて文りある。うた背盾あるべ。れ。の。後。へ。い。つ。と  
 老實ごらう。密語づら。點頭さの計究と妙ん。さうら。や。から。汝。頻。は。朝。夷

が勇敢武藝を稱賛す。れども。何とも。あ。ぬ。真。実。は。和。睦。の。事。ハ  
 今。い。て。議。さ。べ。く。當。座。の。難。義。を。脱。し。ん。ま。の。計。略。は。さ。ら。の。の  
 は。假。し。汝。を。勘。當。し。吉。見。冠。者。は。預。べ。且。く。彼。奴。は。身。を。寓。す。  
 ん。ま。つ。た。笑。く。就。竊。よ。さ。へ。報。知。せ。り。れ。又。後。日。は。較。計。あり。も。  
 勢。漏。と。る。と。口。を。林。示。め。く。駒。と。樹。蔭。を。立。出。る。へ。日。ハ。西。山。ハ。傾。け。は。浩。如。不  
 美。邦。ハ。刀。野。ガ。列。卒。ト。し。後。僕。廣。光。ホ。を。將。之。彼。此。ト。時。夏。伐。身。を。終。つ。  
 端。ま。く。あ。は。聚。合。ほ。く。時。夏。遣。は。れ。を。見。く。呵。こ。う。ち。笑。ひ。吉。見。生  
 吉。見。生。并。平。ハ。客。人。を。送。り。届。く。今。還。り。ぬ。こ。の。ゆ。え。も。獲。は。れ。や。う。ト。塔  
 庵。退。り。まん。誘。め。と。呼。ぶ。れ。の。義。邦。由。笑。う。か。遠。く。そ。の。ほ。ろ。ふ。と。さ。う。  
 何。と。い。ふ。ぐ。ん。え。あ。の。み。山。中。あ。る。ま。う。ら。わ。あ。う。と。と。と。ら。一。遍。を。ぐ。り。た。の。  
 義。秀。の。結。ん。又。誘。こ。の。い。ひ。く。并。平。を。守。ひ。つ。時。夏。と。推。並。ひ。て。麓。の。庵。へ



赴くまぞ江三と井平のあつきの後、跟き後、列卒をいそびて、  
山をぐるぐるのべ。

初輯第十二  
ト繕庵の夜  
黒白谷北地母

却說時夏義邦ハト繕庵におよびければ、より列卒を暇をさせ、  
おろりの消息を告ぐそ宿所へ、より義秀の庵主の僧ト繕共侶出迎、  
衆皆子舎と聚合ほど、時夏の合釋もせ、上座を無と坐し、  
其の次をより、義秀とこれ對ひ、實の座を著し、江廣光ハ癩なる。  
偏提を披死盃をこめ、然實主マ後、ららめ、物語いと具あり、  
ト繕ハ遠く庖漏より、圓頂より、拭の道を掛方首、針苧の袴  
結ゆ、獲りの鳥を庖丁、菜園の音、菘竹林の春、菘種、の米、

て、衆人を御食、心なれ、食殊更、又笑坪、入と、不、の數り、あり、或ハ古今の  
治乱を譚、或ハ文武の奥義を論、言の葉種、の綾錦、た、く、惜き  
團坐る、れ、長き春の日、ちや暮と、燭を継、ぐ、餘奥あり、義邦、ち、の  
席、又、井平、が、竹、の、ぬ、を、あ、ろ、う、あ、く、誣、す、時、夏、よ、ら、對、ひ、覺、め、て、と  
人、も、志、せ、し、和、君、が、愛、臣、ハ、何、処、へ、退、く、ゆ、く、と、奥、の、酒、宴、あ、る、  
渠、が、竹、の、ぬ、を、と、向、く、と、時、夏、ハ、竹、の、ぬ、を、と、向、く、と、時、夏、ハ、竹、の、ぬ、を、と、向、く、と、  
義秀、ハ、勸、め、く、い、ふ、も、既、ハ、英、士、ハ、避、道、く、来、会、を、辱、之、只、恨、む、郊、外、の、夜  
飲、も、且、つ、と、つ、め、の、る、と、あ、ろ、く、聊、用、意、せ、る、一、種、の、有、と、進、ん、願、ふ、の、  
盃、を、舉、め、と、述、訖、座、又、入、ト、繕、入、道、向、ハ、命、せ、し、看、を、と、進、せ、よ、と  
声、高、中、小、呼、を、れ、ハ、庖、漏、の、う、こ、より、阿、と、応、く、ト、繕、ハ、井、平、を、知、り、搦、  
縛、く、と、縁、頼、ハ、牽、居、り、義、邦、主、後、の、光、景、ハ、呆、惑、ひ、目、を、注、し、







且くの辭をばさぐ。毛秀ハ黙然とす。熟視する程。時夏ハ毛邦ホ  
 許し。又といひ。あむ口を引。搦衝と立て。縁煩。又跳り出。刀の提緒を繰。  
 締び。野袴の稜。額。井平と信と。睨視。その背後。又支。わづら。や。  
 毛秀。まうち。對ひ。朝夷。生。ん。あ。り。や。この者。ハ。時夏。ガ。東道。の。寸志。なり。と。  
 かり。ま。の。吉見。ぬ。緯。の。あ。ろ。と。ゆ。り。め。え。し。曩。ハ。某。此。奴。儀。と。と。  
 客人。を。送。り。と。る。よ。う。箭。を。預。遣。せ。し。ハ。猛獸。毒蛇。を。防。る。る。ん。ら。と。い。ふ。て。を。  
 を。さ。ん。介。も。此。奴。ガ。生。才。學。主。の。恥。を。雪。ん。と。て。縁。取。り。り。左。別。也。獵。箭。三。條。  
 射。ひ。か。ど。も。幸。う。と。客。人。を。傷。ら。せ。阿。容。こ。と。久。了。了。云。云。と。告。ぐ。  
 勸。鮮。一。ハ。忽。地。又。宵。月。淡。々。と。憤。堪。れ。れ。も。路。次。の。ゆ。も。自。づ。づ。と。氣。  
 なく。あ。の。と。ろ。へ。恨。と。あ。り。上。僭。も。あ。る。ゆ。う。と。と。や。律。と。厝。つ。と。某。  
 實。ハ。推。氣。の。衝。朝。夷。生。と。獲。り。の。を。争。ひ。ゆ。り。過。言。を。吐。し。り。と。も。

先那を悔て露をさす。宿意を送る。執念深此奴が僻事  
 一。泥塗され。一。面を。つ。つ。み。を。れ。へ。向。べ。腹。立。と。も。朽。を。と。も。言。系。  
 少の速彈き。せめく。今眼前。井平が頭を。削。く。朋友の信を。表。せん。を。  
 者。ハ。不。孟。を。め。ぐ。じ。ぬ。と。い。ひ。あ。む。口。を。引。搦。て。飲。念。せ。と。振。揚。  
 吐。嗟。と。騒。ぐ。美。邦。主。從。起。ん。と。と。れ。ハ。毛。秀。ハ。し。ち。を。知。ま。り。鬼。時。夏。を。  
 推。禁。め。さ。ふ。ま。り。人。君。ガ。誠。心。言。ゆ。と。至。り。盡。せ。り。某。ガ。所。望。王。の。者。ハ。  
 御。家。臣。の。越。度。を。宥。め。と。その。席。ハ。侍。し。ぬ。え。れ。ハ。過。る。御。食。心。を。一。是。裏。の。  
 お。な。さ。ま。の。途。中。と。前。箭。ハ。袂。を。縫。れ。れ。ど。も。御。家。臣。ガ。以。る。こ。は。小。鳥。を。  
 射。ん。と。せ。ら。ぬ。は。巻。ね。ひ。化。箭。は。了。と。と。い。ひ。は。け。と。あ。ら。う。け。て。酒。宴。の。時。  
 その。ゆ。へ。と。や。う。ら。忘。れ。さ。し。ひ。た。ゆ。や。の。杜。伎。ガ。某。を。射。れ。ば。と。て。後。疾。  
 負。し。と。い。ふ。も。あ。ら。ぬ。又。主。命。を。票。せ。と。も。主。の。ゆ。へ。怨。を。復。さ。ハ。是。則。忠。臣。ハ。







盃をめぐぐ之程又美秀數盃を強られ之邦又讓る物多冠者  
 素より酒を嗜む之盃を受つても困どくせん之をけりて時夏ら  
 らんと冷笑ひ吉見や若く其助とあつて向ふ其心を用ひて客  
 人は着せり和殿も着せぬといれ之邦うち微笑を以て論のそへ何そ  
 かと筋を揚て折敷の肉を引よとれ時夏急推林示め其一種の所望  
 ありこの肴をあらわ和殿代りて一度の物も數不血といふと辭さうとを  
 是く美邦頭を傾け其不女うそその意を暗く身も相忘れた物さふ  
 何よまれ宣ひねさけぬらんと諾ひる田舎時夏大まき教びさうん  
 ちうらう朝夷生の篤長老を心めてよ本あども長老辻化しぬいつそ  
 由縁とくいのら寓居の和殿の宿所は限らば便宜は就くおぼせ  
 とも何ごふとらふべたさうこの客人を某が宿所は伴ひ留て誠を竭

せべ所望の肴の則られ然るに家僕井平が不良の心を挟し罪と  
 謝らるよやとといれ之邦親を改め刀野の親望を否とらぬ  
 どもあめりけりて篤長老の師又外戚の一族なり長老今亡といふ  
 とも某ゆてい朝夷ぬを他一人に任用せんその美ありといを  
 由果必時夏の折敷を撥遣り進出さるいせ吉見生所望の肴とら  
 せん諾ひの食言飲某既井平と和殿も預けまぬせりぬれ又  
 朝夷生を某預りて扶持せん是當然の理ありとやと言語せしむ  
 教圍は美邦騒々気色あり教諭の趣ありをゆて和殿が家僕の罪  
 あると朝夷ぬと交換す況肴の酒小加え口腹は充るゆ之彼朗詠  
 介様の盃を勧る料は酒宴の具と資れどもこれさう肴といふべかり  
 客人を弄びとこれ肴とていふよるた不敬かぬと詰られ



時夏ももく被き立過言之美邦和殿のりつらり富さるえと客を留る餘  
 財をもち時夏はゆきたためぬ飲賭けけする客人を阿容こと遠え  
 やと罵ねハト倍廣光向ふりて時夏をさめく小和譚れども酔たる  
 人の癖もさるるは言言と止言言と美秀の光景もさるるも嘆息し  
 其何等の法福ありと。兩君争ひぬめさるる鍾愛せらるることやん志すのれ  
 ども躬ひとると列きて争ひを止る由は。某は又兩君の中違ふ一日もさ  
 地は脚を駐めると。他郷へ赴たゆりんと。い果てまんとて時夏これよ  
 難美くと。繕よ目を注されハ件の入道さるるをゆく。然る美秀を推替ぬ  
 客人且く坐しぬ。貧道聊商量あり。枉て且く坐しぬと推居く時夏こ  
 美邦よりち對ひ刀林の争ひの友は信を失ふと。さあめふよる起れハ孰を  
 褒めづれを敷えん客人の身と置きて。他郷へ退りぬりんと。いりも宜きとや

愚按ふいへども當庵室を旅宿とく。客人を留めぬるその争ひも頓に解て  
 されも優者ぞん。珠客を逐ふ識もあじ。うち任せぬと。老實ぢりて和  
 論ハ時夏は美命と美と。美議むさるる。冠者のさるるを知らぬ。といひ  
 ともを信とる。然れども美邦の身を又たさるるのりつらり廣光ハ倚痛  
 くと。主の袂を掖動し。目と住せと。諫しぬ美邦を中へ面をさめあさるる  
 扇を笏より直し。酒氣又乗くと由もあら。言葉聞ひ。慚愧し。堪ん。菴主の  
 和論承知り。三郎けけりぬりや。といのれと。美秀乃一議及む君のこの  
 居のゆきたを求めぬ。況万里の逆旅あり。孰の処と。宿とせさるると。これ  
 くまれ各位の扶助をす。と志しぬ。美邦時夏大まき。教ひあつた。衣食の  
 月毎は兩家より調進ぐべ。西三月も歴す。人々の学校へ入る。留まるとの  
 む成るべし。その程も。寂寞とも。さよ起居志ぬ。といと。憑りく慰れぬ。



秀も亦これに飲ひまづる酌を執り。盃を交わす。時夏と雲邦の和睦の儀を  
 扱へる兩人をれも及び下とて且くの辞ひ。遂に不意を交易し。宿意を送  
 下とて誓ひ。此彼の問答。春の短夜曉を。東の山際を。比時夏が  
 従僕五六人。馬の轡を牽き。主の迎ふ。まをたれ。おの盃盤を納め。を  
 時夏。雲邦。辭齊。一。上。膳を勞ひ。時夏。が。る。を。憑。え。當座の施物と  
 して。二色の白銀十緒の青銭を。苗。時夏。の馬より。乗。下。従僕。等。小  
 先を。追。し。と。や。柴。門。を。出。し。雲。邦。の。叮。嚀。を。告。廣。光  
 井。平。木。を。お。と。立。出。れ。の。秀。秀。上。膳。の。處。へ。縁。類。の。ほ。ろ。つ。お。く。要。時  
 の。を。目。送。り。ぬ。却。説。朝。夷。三。郎。秀。秀。の。ひ。ひ。ら。く。山。を。ろ。る。草。の  
 庵。又。苗。下。け。の。暮。羽。を。明。せ。の。言。葉。敵。も。た。ま。つ。と。と。ら。ふ  
 ち。の。下。野。の。し。へ。り。学。校。頽。廢。せ。る。も。と。や。鄙。め。あ。れ。と。才。子。交

くと吉見冠者の温順あり。貴公公子といひ。つら。野。太。郎。の。好。智。の。り  
 方を。妬。み。収。貝。を。賊。ふ。と。あ。り。し。人。と。い。は。江。三。二。の。篤。實。多。り。諸。侯。の  
 家。老。と。な。ま。べ。た。の。秋。さ。る。ま。も。媪。子。井。平。の。奇。才。あ。り。信。義。の。渠。を。の  
 主。を。ゆ。げ。れ。ど。も。主。の。お。よ。せ。ら。る。と。な。り。彼。時。夏。が。怒。る。り。井。平。微。り  
 せ。必。不。義。に。陥。ら。ん。縁。取。り。井。平。が。これ。を。射。つ。の。主。命。な。ま。は。先。を。の  
 ち。ろ。を。つ。ま。よ。ゆ。と。せ。と。後。は。射。つ。け。の。忠。あり。も。さ。の。罪。を。よ。み  
 負。く。主。の。隱。慝。を。顯。き。多。九。慮。の。及。ぶ。所。よ。あ。り。と。今。これ。を。と。と。と  
 揃。る。又。吉。見。主。従。の。入。道。上。膳。さ。ら。う。ち。解。て。の。相。譚。く。と。深。念。し。と。と  
 方。人。の。菴。主。の。入。道。上。膳。さ。ら。う。ち。解。て。の。相。譚。く。と。深。念。し。と。と。と  
 對。ひ。を。ら。た。れ。も。物。の。ひ。ひ。と。推。談。せ。ん。又。時。夏。が。宿。所。より。贈。る。酒。食。の  
 あり。と。先。上。膳。に。飲。食。を。の。ら。る。と。の。助。を。と。と。と。の。用。心



それゆゑ。誂とよむも。時夏も。義邦も。さうく。諸君を。後叙を。訊慰也。  
ト。善ハ心を切て。これ又。はるもの。如く。款待。真成あり。また。その。いとく。疑心。片  
山蔭。春暮れて。酷暑。堪ぬ。六月の上院。又。なつた。茶吹。おろし。朝の  
風。檐下。おろす。夕の雲。霽く。六月を。搔流。之。背門の。鏡の水音。夏を。忘る  
ふ。が。あり。現山居の。甲斐。ある。と。さへ。里中。おろし。日毎。彼此を。細細  
と。彫庵の。北月の。うゑ。いと。大なる。竹藪。ま。藪。あり。ある。此。あり。山の。峽  
より。南。入。且。六千。尋の。谷。ゆ。樵。夫。おろし。谷の。底。闇。され。黒。白。谷。を。呼  
ぶ。あり。有。一日。又。義秀。の。筍。を。掘。んと。秋。金。を。引。提。て。出。折。義邦。の。使。と。さ  
江。三。廣。光。の。小。厨。又。偏。提。折。櫃。を。齎。し。柴。門。の。ある。さ。う。り。坐。腹。さ。り。く  
入。り。それ。へ。義秀。を。申。由。られ。を。さ。ん。く。さ。う。く。丁。を。と。か。り。り。又。秋。金。の。ひ。かり。と  
先。よ。支。駈。て。母。屋。誘。引。が。ト。善。ハ。遠。く。茶。碗。を。濯。て。茶。と。さ。め。け。送。り。

恙。ある。を。祝。し。祝。され。既。坐。も。定。り。當。下。三。廣。光。の。小。厨。ふ。り。せ。り。  
折。櫃。と。偏。提。を。と。と。と。近。く。と。り。よ。せ。朝。夷。ぬ。と。の。二。種。の。あ。つ。つ。る。ぬ。ぬ。ぬ。  
あれ。ども。後。然。を。訪。ま。ぬ。さ。る。則。主人。が。寸。志。あり。ぬ。さ。る。べ。う。も。と。い。ひ。け。て。  
恭。しく。さ。う。久。し。義。秀。笑。え。頭。を。拊。今。も。さ。め。ぬ。吉。見。ぬ。の。好。意。  
報。さ。る。時。ま。う。ん。と。い。と。心。苦。し。た。ま。ま。よ。辱。し。と。を。醫。し。く。彼。酒。  
香。を。お。り。ゆ。え。け。ト。善。ハ。涎。を。拭。ひ。消。し。ぬ。り。夏。の。日。酒。ほ。ど。涼。死  
め。の。へ。し。江。生。ゆ。け。の。暑。心。へ。さ。を。途。せ。が。堪。え。り。けん。偏。提。を。披。き。え  
あ。ど。志。申。間。仕。ん。と。老。實。が。ら。え。地。坑。又。鹿。菜。を。焼。つ。れ。ハ。義。秀。も。笑。  
坪。を。入。り。退。ん。ん。と。の。廣。光。を。さ。り。さ。り。留。め。く。寶。主。三。人。小。厨。三。百。の。ぼ。し。く。  
端。ら。う。園。居。の。偏。提。を。披。死。着。を。と。り。さ。り。け。盃。の。隙。を。た。ま。ま。巴。の。字。を  
ぬ。び。香。の。圖。に。往。返。し。く。さ。う。推。つ。時。移。る。ま。ま。お。の。く。数。不。費。を。傾。け。る。









巴蛇を  
討つ



朝ひる

巴蛇を  
討つ  
朝ひる

朝夷二編卷一

十七



頭件 中蛇

江に横たふ虹のごとく。浅緑の光あり。眼の百煉の鏡のごとく。青の  
眸に似たり。るるあやたの毒蛇人を呑んて。その腹に至らん。胃  
より上の口中あり。と足に腫れ。その人右の口をさし。しる。しる。何  
人をとめて。その夜の色は。覚あり。この紛ふ。あやめ。菴主。信る。し  
る。秀訝り。あやめ。上。信る。と。分際。ある。大蛇を。それ。さ。刃。さ。あ。び。て  
向んや。あやめ。その。實法師。が。酔臥。する。折。を。ぬ。庭。の。さ。も。近。つ。た。と。粗  
糸。と。も。る。程。も。う。う。び。大蛇。は。呑。れ。な。ん。だ。う。う。さ。の。刃。を。合。る。三。相。忘。し  
る。ぬ。死。さ。め。密。書。や。め。と。も。う。う。ら。て。さ。か。き。裡。面。は。走。り。入。り。渠。が。調  
度を。展。檢。る。果。し。と。時。夏。より。遺。り。る。教。通。の。状。あり。さ。中。に。朝。夷。の  
酒。を。強。く。あ。ま。り。酔。臥。さ。を。竊。し。殺。し。て。死。骸。を。棄。ふ。と。正。し。く。書。る。め  
の。目。の。呵。と。う。ら。笑。ひ。鳥。の。林。に。隠。れ。鳴。く。も。その。声。必。外。に。聞。ゆ。人。の

竊し謀れども。あやめ。と。の。み。こ。り。揚。震。り。四。知。の。滅。果。さ。る。と。ひ。り。り。点  
頭。件。の。状。を。卷。き。め。あ。づ。痒。の。赴。き。吉。見。へ。告。ん。と。あ。め。も。里。遠。な。れ。ば。人。も。は。し  
蛇。毒。に。觸。れ。と。疲。勞。さ。り。偏。提。し。餘。り。の。あ。る。べ。死。又。一。碗。を。傾。け。と。も。め。く。も  
と。あ。め。と。あ。づ。恥。し。盃。を。拭。ひ。淨。め。て。執。子。を。引。き。獨。酌。去。て。居。り。け。る。  
作者。云。上。膳。ハ。肉。食。米。糞。の。法。師。也。且。當。時。兵。乱。騷。擾。の。後。な。れ。ば。人。と。い。ふ  
と。あ。め。も。兵。器。を。嗜。む。と。い。ふ。べ。く。と。あ。め。も。庵。中。に。兵。器。を。貯。る。と。い。ふ。た。は。その。野  
心。を。頭。を。あ。ま。り。さ。る。作。事。又。後。邦。へ。固。り。時。夏。を。疑。へ。り。さ。も。山。中。非。常。の  
准。備。も。茂。秀。が。あ。ま。り。と。弓。箭。を。苗。め。む。と。あ。め。も。それ。を。前。に。ひ。き。か。き。茂。秀。が  
蛇。を。射。り。及。び。と。あ。め。も。猛。は。後。邦。が。弓。箭。を。苗。め。む。と。い。ふ。の。蛇。蝎。の。言。に  
時。夏。水。が。陰。隱。再。く。頭。を。と。め。あ。め。も。さ。る。と。あ。め。も。その。所。あ。る。

朝夷巡鳩記全傳第二編卷之一 終



